

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04601

研究課題名(和文) 地域社会における不登校・ひきこもり支援の実践コミュニティ生成過程

研究課題名(英文) The process of building the communities of practice for hikikomori support activities in the local community

研究代表者

松本 大 (MATSUMOTO, Dai)

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：50550175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地域社会においてひきこもり支援の活動が新たに生成する過程を分析した。その結果、ひきこもり支援を新しく創発するということは、ひきこもり当事者だけではなく、団体間に安心を軸とした「情動のコミュニティ」を共同構築することであることを明らかにした。この共同構築の過程は学習の過程でもある。討議ではなく「一緒に活動を行う」という直接的な相互行為や時間の共有のなかで、安心という感情や団体のレジリエンスが生まれる。この実践コミュニティは、地域社会をラディカルに変革するわけではない。しかし安心による結合をとおしてルーティンとして存在し続けることが、ひきこもりをめぐる権力作用への抵抗となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、地方や農村部におけるひきこもり支援の生成に焦点をあてたことである。都市部と比較してひきこもり支援活動の絶対数が少ない地方や農村部において、自発的な支援活動をいかにつくり持続させるのかという、当事者にとって切実な課題の解決につなげることができる。第二に、ひきこもり支援活動を地域権力構造との関係で分析したことである。従来は、団体内部・施設内部だけに焦点をあてた分析を行うことが多かった。第三に、「安心」「情動のコミュニティ」「ルーティン」という鍵概念を析出し、地域社会においてひきこもり支援が創発する過程をメンバーや団体の「学習」の過程として動的に明らかにしたことである。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the process by which support activities in relation to hikikomori emerge and are sustained in the community. The creation of new support for hikikomori in the community means the joint construction of "communities of emotions" based on the relief, not only among hikikomori sufferers but also among organizations. This process of co-building is also a process of learning. Instead of discussions, direct interaction and sharing time to "work together" creates a sense of relief and group resilience. Communities of practice created through collaboration based on a sense of relief do not radically reform the local community. However, continuing to exist through routine and a union based on relief can itself be a form of resistance against the powers that center on hikikomori.

研究分野：教育学

キーワード：ひきこもり 若者支援 社会教育 成人教育 成人学習

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

居場所づくりなど、ひきこもりの若者支援が重要な課題になっている。現在、ひきこもりを対象とする研究は、社会学における研究に代表されるような、当事者が自らの経験に対してもつ意味を明らかにするエスノグラフィックな研究が主流になってきている。一方、社会教育研究では、当事者個人ではなく、支援団体や支援施設の活動内容の意義を分析する研究が進められてきた。つまり個人の意味付与に焦点をあてる社会学的研究とは異なり、社会教育研究は、ひきこもり当事者が事業や施設をとおして社会参加することによる、相互的・集団的な学びとエンパワーメントの過程や方法を対象としてきた。

これら従来の研究には、既存の活動や団体を所与のものとして前提としているという共通点がある。しかし、地方や農村部などでは、そもそも若者支援活動が存在しないところもある。つまり地域に該当する活動がないゆえに、当事者は社会参加したくてもできない現実がある。また、「チーム学校」や「地域学校協働活動」が前提としているように学校と地域が連携して子どもの課題を解決する際にも、そもそも地域のサポート資源が乏しい場合には連携も成り立たない。つまり実践的にも研究的にも求められるのは、まずは地域にいかに関与する活動をつくるのかという視点である。そこで本研究は、ひきこもりの支援活動が地域に創発・持続していく過程に着目した。

ひきこもりの支援活動の創発・持続を明らかにする際に求められる分析視角として、大きく次の3つがある。第一に、ひきこもりに関する自発的な支援活動は自然発生的には生まれにくいということである。例えば阿部真大は、居場所は周囲とのコンフリクトを解決するなかで生まれるがゆえに、居場所づくりにはそれを潤滑に進める「コミュニケーター(ファシリテーター)」が必要であると指摘している(阿部、2011)。つまり支援活動が生成する際には、それを適切に進める支援者が存在していることになる。支援活動それ自体の支援者の役割とその支援方法を解明することが求められる。

第二に、活動生成の過程をメンバーや組織の学習の過程として分析することである。なぜなら、支援活動とは設立されればそれで終わりというのではなく、当事者や状況に合わせてたえず変化していくものである。つまり支援活動の生成と持続を、そこに関わる人びとや組織の学習の過程として動的に分析することが重要である。本研究は、状況的学習論の立場から、活動の生成と変化を実践コミュニティの発達の過程として分析する。

第三に、支援活動を地域社会との関係のなかで分析することである。従来、ひきこもりの支援活動については、団体内部・施設内部だけに焦点をあてた分析を行うことが多かった。しかしながら支援活動が生まれ続けていくということは、真空状態で行われるのではなく、外部からのさまざまな影響を受け、あるいは同時に外部に影響を与えることでもある。

以上の背景から、本研究は、地方における地域社会においてひきこもりに関する市民による自発的・協働的な支援活動が、なぜ、いかにして生まれるのか、そのときいかなる学習が作用しているのか、ひきこもりに関する支援活動の創発と持続の過程を明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

上記の問題関心にに基づき、地域社会におけるひきこもり支援の実践コミュニティ創発・持続の過程を、そこに関わる人や組織の学習という観点から明らかにしていく。具体的には、次の3点について解明する。(1)ひきこもり支援活動の創発過程。(2)ひきこもり支援活動が創発・持続するうえでの、中間支援の役割とその支援方法の解明。(3)ひきこもり支援活動の創発に作用する地域権力構造。

3. 研究の方法

本研究は、ひきこもり支援の実践コミュニティにおける学習を、スタッフ、当事者、中間支援、地域住民等といった複数のステークホルダーの相互作用のなかにとらえている。このような時間的・重層的な実践コミュニティ生成の過程を明らかにするために、インタビュー調査によって実践コミュニティ生成と持続の力動を濃く記述していくことを目指した。

調査地域としては秋田県を選定した。秋田県では、県内全域で市民レベルでの支援団体の掘りおこしとネットワークが活発に行われており、若者の「居場所」が県内各地に点在している。秋田県における支援団体の多さについて、支援団体の学びという観点からインタビュー調査を実施し、支援に関わる人や組織の学びが地域社会における若者支援活動の活発さや団体数の多さにつながっているのかを明らかにした。

具体的には、2017年度は秋田県において若者支援団体の中間支援を担うNPO法人KOUを取りあげ、県内全域にわたる市民レベルでの若者支援団体への支援の過程と方法を分析した。2018年度は、KOUに加え、そのKOUの支援のなかで誕生した北秋田市における若者の居場所づくりの団体の調査を進めた。

4. 研究成果

地域社会においてひきこもり支援の活動が新たに生成・持続する過程に関して、おおよそ次のことが明らかとなった。

第一に、ひきこもり支援には地域社会で構成された権力が作用していることを指摘した。つま

りひきこもり支援の実践コミュニティは、コミュニティ内部の相互作用だけではなく、コミュニティ外部の権力作用の影響も受けながら構成される。

具体的には、地域社会ではひきこもり支援活動に対して次のような権力が作用していた。(1)ひきこもりを自己責任や家族の責任とみなす社会的な権力である。(2)そうしたひきこもりを自己責任や母親の責任ととらえる社会的な権力は、当事者や家族の自己評価を低下させ無力化するだけではなく、支援を行う側の勢力も弱体化させる。(3)こうしたスティグマは、当事者を地域から隠す方向で作用する。ひきこもりであるということは周囲に知られたくないことであるため、当事者や家族はひきこもりであるということを近所に隠そうとする。結果として、当事者の地域との関係が切断され、ひきこもりの当事者をますます家に閉じ込めてしまう。(4)このような権力関係が存在するがゆえに、地域における支援団体の数が少なくなってしまう。その結果、ひきこもり当事者だけではなく、支援団体のスタッフも存在論的不安(ontological insecurity)や孤立を抱えることになる。

日本においてひきこもりは、アンソニー・ギデンズの「実存的問題」(existential questions)の議論と関連づけられて分析されてきており、ひきこもりは存在論的不安の状態として指摘されてきている。本研究は、地域社会との関係のなかで、ひきこもり当事者だけではなく支援団体も存在論的不安に直面していることを明らかにしたといえる。

第二に、団体そのものも存在論的不安を抱えているなかで、地域社会にひきこもり支援を新しく創発するということは、ひきこもり当事者だけではなく、団体間に存在論的安心(ontological security)を軸とした「情動のコミュニティ」を共同構築することであることを提起した。例えば北秋田市のような「利用者が1人」という状況では、まずは団体そのものが消滅しないようにすることが切実な課題となっている。こういう厳しい状況でも活動を維持できるのは、KOUのような同じ立場の仲間との交流でつくられる安心や希望があるからである。

田辺繁治は、こうした情動的で共同的な関係で構築される実践コミュニティを「情動のコミュニティ」と呼んでいる(田辺、2012)。田辺は、北タイのエイズ自助グループの例をもとに、言説や概念による討議ではなく、直接の対面的場面での共感的・情動的関係のなかで、共同性や活動力が生まれてくることを明らかにしている。本研究についても、団体同士の交流のなかで「情動のコミュニティ」が生成したと言ってよいだろう。つまり、地域社会にひきこもり支援活動を創発する際の「学習」とは、情動の共同構築のなかで支援者としての存在論的安心を形成する学習の過程として示すことができる。

第三に、地域社会に支援団体の「安心」という「情動のコミュニティ」が構築される際の教育的支援の方法を分析した。調査の結果、大きく次の4点が明らかになった。

1つ目に、「科学的知」ではなく「関係性をつくる」ことである。ここでいう「関係性」とは、利用者同士や、支援団体と利用者との関係だけではなく、「団体間の関係」をつくるという意味である。本研究は、このように団体間の関係をつくる過程を、「一緒に活動を行う共同学習」と名づけた。団体同士の共同作業が現地団体や利用者の自己肯定感を高めていた。このように本研究は、団体同士が一緒に実践を行うことによる相互交流が若者支援団体の生成・持続に有効であることを示唆している。地域社会にひきこもり支援の活動を創発するためには、支援の当事者としての支援者同士のつながりが生起するような仕掛けをつくるのが有効であるといえよう。

2つ目として、団体間の協働的な関係性が対等な関係ではないということも重要である。KOUと現地団体との関係性は、先輩と後輩のような「斜めの関係」であり、KOUは現地団体よりも経験のある「先輩」としてのロールモデルになっている。秋田県において若者支援の団体が地域に多数創発された過程とは、先輩団体と後輩団体が一緒に実践コミュニティに共同参加することによる、協働的な課題解決の過程であるといえる。

3つ目に、団体同士の「一緒に活動を行う共同学習」は、討議というよりも、レクリエーションなどをとおした情緒的な時間の共有であった。このように相互に安心を共有し自己を肯定する空間は従来「居場所」として描写されてきた。しかしながら主流の成人教育研究は、言語的コミュニケーションによる経験学習や、フォーマル/ノンフォーマルな成人教育プログラムを強調するために、「居場所」的なインフォーマルな関係性における情緒的な学習を説明することは困難である。本研究は、インフォーマルな観点や感情的な側面からの学習理論構築の必要性を提起するものであるといえる。

4つ目に、ルーティンとして活動が継続的に維持されることである。ギデンズは、日常のルーティンをとおして存在論的安心が形成されると指摘しているが、他団体との協働によって団体活動が維持され、活動が地域に持続していくことが重要である。

以上本研究は、地域社会においてひきこもり支援の活動が新たに生成する過程を分析した結果、ひきこもり支援を新しく創発するということは、ひきこもり当事者だけではなく、団体間に安心を軸とした「情動のコミュニティ」を共同構築することであることを明らかにした。団体同士が「一緒に活動を行う」という直接的な相互行為や時間の共有のなかで、安心という感情や団体のレジリエンスが生まれる。こうした安心による結合をとおして支援活動が地域にルーティンとして存在し続けることが、ひきこもりをめぐる権力作用への抵抗となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松本大・廣森直子・小林建一	4. 巻 119
2. 論文標題 地域社会における若者支援活動の生成と学び	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 95-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Dai Matsumoto
2. 発表標題 Establishment, Empowerment and Professionalization of Voluntary Youth Support Organizations
3. 学会等名 World Education Research Association 2019 Focal Meeting in Tokyo（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Dai Matsumoto
2. 発表標題 Cultivating 'Communities of Emotion': Resisting Local Power Structures Centered on Hikikomori
3. 学会等名 The 20th International Conference on Education Research（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本大・廣森直子・小林建一
2. 発表標題 ひきこもりに関する若者支援活動の生成と変容
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本大・廣森直子・小林建一
2. 発表標題 地域社会における若者支援活動の生成
3. 学会等名 日本社会教育学会第64回研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 福島 裕敏、松本 大、森本 洋介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 256
3. 書名 教育のあり方を問い直す 学校教育と社会教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	廣森 直子 (HIROMORI Naoko) (40315536)	青森県立保健大学・健康科学部・講師 (21102)	
研究 協力者	小林 建一 (KOBAYASHI Kenichi)		